

幼児の発達と劇あそびの指導について

四日市市幼稚園言語サークル

石坂昭子



(一)はじめに

現在の幼稚園(四日市を対象として)における劇あそびは、はたしてこれでよいのだろうか。幼児の発達に適しているだろうか。どこか欠けているものがあるのではないだろうか。従来の劇あそびをふりかえって、こんな疑問が生まれたのである。

即ち、劇あそびなどと、とかく人に見せるためのものになってしまったり、また、日常の保育の中での劇あそびといつても、あるストーリーをおつてまとまりのあるものにしようとする、といった、教師自身の満足におわっていたのではないだろうか。また、幼児のなまの表現をとりいれるといながらも、実際の場面では、ほんとうの幼児から生まれた感動表現といったものがなか

なかでてこない。それはなぜなのだろうか。これら、かずかずの疑問から、教師が知らぬ間にもつてしまっている劇あそびというものに対する固定概念を打破し、根本的にこの問題にとり組んでみたいと思い、四日市市における言語サークルの課題として、劇あそびの指導は、どのように考え、どのように進めたらよいかということをとり上げることとした。以下に、実践記録をもとに、話し合い、問題点としたことなどをしるし、その指導についての経過をたどってみたいと思う。

(二)一学期の実践から

まず、わたくしたちは、幼児自身の内面的な感動表現を見出し、それをたいせつにするために、幼児のことば、動作を、教師

は、どのように、受けとめたらよいか、ということを第一段階として、一学期間の児童たちのあそびの中で、自然発生的な形であらわれてくるか、また、それをどのように発展させていったらよいか、ということで、実践記録をとつてみることとした。

実践記録 例一

『前日からの魚つりごっこが、今日も登園と同時にはじめられた。積木で釣堀のかこいをつくり、釣屋さんの人になつた子が、魚をその中に入れ、釣竿の用意をする。「まだですか」とお客様がたずねてくる。「まだはじまりません。九時からです」とか、「もうじき、お店をあけます」など、適當な会話がかわされて、着々と準備がすすめられる。お客様になる子は、まだかまだかと開店を待っている。いよいよ開店、順番に並んで釣竿を受けとり、魚つりごっこがはじめられる。

釣竿についている磁石の力で、魚の先についているゼムを利用して、釣り上げるあそびである。「ワア、今日は、こんな大きい釣った」ところ、ぶん、「今度こそ、あのたこを釣るぞ」と意気込む子、お客さんになって釣りたい子は、だんだんとふえてくる。「もっと広くしよう」ということになって、積木が全部総動員され、一段と広い釣堀になる。みんなが釣つて魚がなくなると適当に釣屋の子は、釣つた魚をまた釣堀に戻して、何回となく魚つりごっこをくり返している。

その中に、A児が「ここアールにしやへん?」と提案、魚つりにもそろそろあきてきた頃なので、みんな大賛成、魚はたちまちかたづけられて、ブールに早がわり、ほんとうに水がはいっているのかと錯覚をおこしそうになるくらい、子どもたちは、その中にはいって、いかにもたのしそうに、足をバタバタさせたり、手をクロールのようにして水をかくまねをしたり、大にぎわいで、水泳ごっこがはじまる。「第一コース○○くん」「第二コース○○くん」といったアナウンサーもあらわれてくる。その中にまた、からになつた積木の箱を「とび込み台にしやへん?」という子ができるて、みんながわれもわれもととび込み台に列をつくり、とび込みごっこがはじまる。

とび込み台に立つたときの子どもたちの真剣な表情、両手をぴんと横にあげて、さっととび込む子、上にのばし、横におろしたりしてとび込む子、とび込み方も、一回転ぐらいしてとび込む子や、半回転ぐらいする子、そのままとび込んで、泳ぐ恰好をしていく子、など実にさまざまである。ひとりひとりがまるで、オリンピックの選手にでもなつたような意気込みで、それぞれに表現をくふうしながらあそんでいる。

しかし、一方からみると、魚つりごっこでさかんにかわされていた会話は、水泳ごっこにうつる頃から少くなり、さらに、遊び込み方に注意が集中すると、会話はほとんどかわされなくなり、表現の仕方におもしろさを見出し全力をつくしているといった活動振りに変化していった。そして、魚つりごっこにはじまったあそびは、水泳ごっこと遊びみごっこと発展し、帰るまで、あきることなく、たのしそうに、しかも、学級の半数以上の子が、このあそびに興じた。』

実践記録 例二

『毎日のあそびで、忘れられることのないまま』とあそびは、いつにおいても、どこにおいてもおこなわれ、幼児にとって、きっときれないあそびのひとつであるが、その中で子どもたちは、

どのように活動し、あそんでいるのだろうか。そつとのぞいてみることとした。

「わたし、今日おかあさんにして」とA子、B子、「うんいいわ」と早速、おかあさんという重要な役割がきめられて、あそびがはじまる。「わたしお姉さんになる」「わたしは赤ちゃんになるわ」「あんたは、幼稚園にいっている子になるやわ」「ぼくおとうさ」など、「わたし、オルガンの先生やに、ここに習いにきて」など、それぞれの役割がきまっていく。赤ちゃんといわれた子は、お人形用のふとんにねている。おかあさんは、いそいそとサロン前掛をして、「ちちそうつくりをする」「はい、はんですよ」「これおかげやに」とはんの用意ができると、おかあさんがたべだす。そして、「おとうさんはもう会社へいくのさ」といわれて、「いってきます」と下児は、おとうさんきどりで出かける。オルガンの先生になるといつた子は、オルガンのそばにたって待つている。「早く誰か習いに来て」「今、幼稚園から帰ったらいやんか」と、全く日常の生活そのままをあそびの中に再現し、おかあさんはおかあさんらしく、オルガンの先生は、先生らしく、そのものになりきって表現している。「オルガンの先生の所へも、ごちそうをもっていかなくちゃ」とおかあさんは、いそいで、おぼんの上にごちそうを並べてもつていく。「これどうぞ」「じちそうさま」さりげなく、こんな会話がかわされる。

その中に、男児が三名、「入れて」とやってくる。「ぼくら犬になるわ」といつたかと思うと、「ワンワン」とほえながら、四つんばいになって、歩きまわる。こわがって逃げる子、犬はますます得意になつて「ワンワン」とほえながらはいまわる。ほんとに犬になりきつてたのしんでいるといった表情、その中に、「い」と、ぶたのうちにしやへんと下児がいい出して、こぶたと狼のあそびがはじまる。狼になつた子らが、さも強そうに、「ウオーウオー」とほえながら、こぶたの家にやつてくる。「トントン」「誰ですか」「狼です。いれてください」「いやですよ」「よし、こん

なうち、ふきとばしてしまって」「ぶうぶう」「ワ、こわいこわい」大変なさわぎでにぎまわる。つかまつた子が、また、狼になつて、こぶたのうちにやつてくる。こんな単純なあそびではあるが、ままごとから発展して、ほんとうに、こぶたや狼になりきつて、くり返しきり返し、よろこんであそぶ。』

紙面の都合で、他の実践例は、省略するがその他、ままごとコーナーから発展したいろいろなあそび、即ち、お店やさんじつっこ（魚やさん、時計やさん、おもちゃやさん、そばやさん、おしゃやさん、花やさん、くつやさん、やおやさんなど）幼稚園じつっこ、電話じつっこ、おばけじつっこ、探検じつっこ、などがみられたわけである。

そして、これらのじつこあそびの中で、幼児たちが、たのしそうに、のびのびと、そのものになりきつて、自己表現をしている。というと、また、自由自在に、役割をたのしみ、日常どちがつた人間関係、つまり、自分以外のものになつて、自分を開放しているということなどが、くみとられたのである。即ち、教師に、それをうけとめようとするかまえさえあれば、素朴な日常のじつこあそびの中に、劇あそびにつながると思われる、種々の活動がなされていることを発見できるのだという事実を、改めて認識させられたのである。

○一学期としての問題点

わたくしたちは、これらの記録をもとに、話し合い、一学期としての問題点を考えてみた。

1 幼児は、自己中心的であるから、ことばよりも、身振り、行動で意思表示をすることが多いのはいうまでもない。5才児でも一学期の段階では、この傾向が強く、身体表現においてそのものになりきつているときは、言語活動が少なく、低次なものになつて、どうにしていったらよいか。

2 そのものになりきつてあそぶということから、さらに、歩進んだ段階、即ち、劇あそびとして、発展させようとすると、内面的なたかまりを育てつつ、劇あそびを発展させるためには、どのようにしていったらよいか。

3 教師の働きかけいかんによって、劇あそびは、どこまでも発展するが、その働きかけは、いかにあるべきか。

以上の三点に問題をしづぱり、以後の活動をすすめていくことにした。

(三) 二学期の実践から

一学期における問題点をふまえて、二学期は、どのようにすすめていったらよいかを話し合った結果、自然発生的あそびを発展させた段階ということを念頭に、二学期の前期として、どの程度

の劇あそびができるか、また、どのように与え、それが、どのように発展したかということを、明らかにしてみたい、ということになつた。しかし、この場合、与える題材がまちまちでは、このようなことを明らかにすることが困難なので、一応話し合つてひとつ題材をきめることにした。この場合、題材として、何を選ぶかといふことも、いろいろ話し合つたが、えらんだものが、よかつたか、わるかつたかは、実践記録に結果としてでることであ

るから、ということで、余り深く考えず、『ちびくろさんぽ』をえらんでみた。というのは、一学期の教育テレビ番組に、『ちびくろさんぽ』がくまれてあって、それぞれの園で視聴しているし、絵本もあり、紙芝居にもなつていて、児童たちになじみがあるので、よいだろうということできつた。この実践例についても、紙面の都合上、詳細は省略し、二、三、の実践例のアウトラインのみをあげる。

実践記録 例一

『まず、『ちびくろさんぽ』という紙芝居をみせた。非常によろこんでみたが、教師が意図したほどに、のつてこない。教師は、注意を喚起するようにして、もう一度、みせてみた。そして、これを劇あそびへの導入の手がかりとして、早速に劇的な表現あそびにもつていこうとした。しかし、児童は、とらが、『ちびくろさんぽ』から、いろいろのものをとりあげるところや、とら同士、

けんかするといった部分に興味を示し、それらの場面における、どんちゃんさわぎ的表現をおわって劇あそびとしての発展をみると、ことができなかつた。児童が強く印象に残つた、ある一部分のみに興味を示し、それをくり返すことをよろこぶということは、当然のことで、それはそれでいいとして、そこから進んだ、二学期の段階としての発展というものをみると、できなかつた。』

実践記録 例二

『紙芝居も、絵本もなく、教師自身もあまりこまかい内容のストーリーを知らぬまま、『ちびくろさんぽ』の歌があるので、歌をうたうことから導入した。さいわい、テレビや、絵本などでみていて、『ちびくろさんぽ』のお話がどんなものであるか、『ちびくろさんぽ』って何なのか、といったことを、おぼろげながらも知つてゐる児童がいたので、一層興味をもつて、この歌をうたうようになつた。まりつきをしながら、この歌をつかつてあそぶといふほどに、すっかり、児童の生活の中にとけこんでいたわけである。しかし、運動会などの関係で、劇的発展をみないまま、しばらくは、うたうことのみにおわつていて、運動会につかうお面をつくつたことからヒントを得て、劇的な表現あそびへ誘導してみたのである。即ち、それそれにできたお面をつけて、グープに分かれた動物の家へ、『ちびくろさんぽ』があそびにいき、服や傘など、いろいろな動物から誕生日祝いとしてプレゼントして

もらうという想定のもとに、教師自身が、"ちびくろさんば"になつて、それぞれの動物の家を訪問したのである。「こんなにちは、きょうはわたしの誕生日なんです、あそびにきました」といふと、動物たちは、よろこんで、「先生が、"ちびくろさんば"だつて」と大よろこびし、「これプレゼントです」など口々にいなながら、傘や服をおくりものしてくれる。このようにあそびながら、児童たちの中に、この"ちびくろさんば"の名がとけこんでいったのである。

けれども、この場合、それぞれの動物の家では活発な動きがみられたが、動物同士のつながりといふか、みんなで、ひとつのおそびをしているという連帶感は全くなく、断片的なあそびにおわった。しかし、"ちびくろさんば"の名が、ますます児童たちに親しまれるようになつたことは、いうまでもない。また、ゲームあそびにも、この"ちびくろさんば"をとりいれて、劇的扱いとして、"ちびくろさんば"が誕生祝いに動物たちとあそぶという場面にして、展開させていった。さらに、言語活動へのきっかけもつくるよう配慮し、徐々に、その場その場において、ことばのやりとりも加えて、あそびを発展させるようにした。こうして、児童たちの中にとけこんだ、"ちびくろさんば"の劇あそびは、児童たちの期待といったものも、大いにおりませながら、あそびを中心として発展させ、一応の劇あそび的活動にまでもつていくこ

とができたのである。』

なお、絵本もなく、紙芝居も、テレビの設備もなかつた園の場合は、"ちびくろさんば"といつても、それが何であるかということもすらわからず、全く児童が知らない状態なので、発展を云々する余地もなく、この園の場合には、題材として適当でなかつたといえるので、これをとりあげることは中止した、という経過もあつた。

以上、二、三の例をあげて、大まかなことを述べてみたわけであるが、この中に、わたくしたちとしては、かずかずの問題を見出したのである。

○二 学期としての問題点

例一でもわかるように、紙芝居による導入ということは、従来からもしばしばおこなわれてきたことであるが、必ずしも、成功するやり方とはいえない。(この方法がよいといわれてきたわけでもないので、ことさらに強調すべき問題でもないわけであるが)かえって、創造性を阻害するという結果になりかねない。

また、教師があせつてまとまりのあるストーリーに結びつけていこうとするることは、よくないことであると、教師としても充分知つてゐることであり、自分自身も、こういうことについては、警戒しているつもりであるが、この例一の記録にみられるように、案外、知らぬ間に、その危険なあせりにのつてしまつてゐる

というのが、通例ではないだろうか。わたくしたちは、この「記録」をとることにより一層、はつきりと、その現実をみせられたようにも思ふ、大いに考えさせられたのである。

一方、例二は、一応幼児たちもよろこび、教師の意図した方向へと発展したわけで、これは、何によるのだろうか。ということを今少し、分析して考えてみたいと思う。

1 歌から導入したということ、また、その歌が、幼児にぴったりとしていて、非常に興味深くうたわれたこと。

2 日常生活にとけこむまで、歌だけの段階をたのしんだこと。

3 運動会につかうお面つくりというチャンスをのがさず、劇あそびへの糸口を教師がとらえたこと。

4 そして、さらに発展させるための段階として、あせらず、ゲームあそびなどにとり入れて、『ちびくろさんぽ』を幼児たちの中にとけこませていったこと。

5 教師自身が、まず、幼児の中にはいり感動をもって、『ちびくろさんぽ』そのものになりきって表現し、幼児の中にはいつていったということ、このことは、例一でも述べたように、教師として、充分承知のことなのであるが、実際の場において、自分も幼児になりきって表現するということは、なかなか実行されないので、現状ではないだろうか。

6 ストーリーが、いろいろあって、固定化されていなかつたこと。『ちびくろさんぽ』の名まえさえ知らない幼児たちには、発展を望むことはむりであろう。しかし、名まえには、親しみをもち、ある程度までは、話も知っているが、固定化したものになつてない。そのため、自然な形で、生活経験の中から、いろいろのものを自由にとり入れて、即ち、誕生祝いという設定をしたり、ゲームあそびをしたり、といった身近な経験やあそびをふんだんに組み入れながら、しかも、幼児自身、それぞれの活動の中で、そのものになりきって、表現をたのしむことができたといえよう。

大まかにあげてみても、以上のようなことが、いえるのではないうだろうか。勿論このように発展したということは、誰にも通じることとはいはず、その組、その先生といった、いろいろな条件が、他にも重なっているということはいうまでもないが……。

そこで、次の段階として、わたくしたちは、この成功例にならつて、十二月のクリスマスに、何か、クラスでやってみようということになり、今度は、題材を限定せず、その園なり、その組の特色をいかして、教師と、幼児と、一体になつた、たのしい劇あそびをしてみよう、ということにきめた。

そして、また、集まつて、みんなで話し合つたところ、題材は『七ひきの子やぎ』、『赤ずきん』、『大きな木根』、『こぶとりじいさ

んなどであった。方法としては、リズム表現などを中心にし、ときには、教師もその一員となってあそぶなど、前回の話し合いで得たものをふまえて、発展させたわけである。

ここでわたくしたちは、どうして、こうも申し合わせたよう、どの園でもとりあげられた題材が片寄つたのだろう？ とびっくりしたのであるが、結局、昔からある、なじみ深いもの、ストーリーをよく知っているものに、幼児たちは、親しみを感じその中にはあそびなどをとり入れることによって、一層たのしさをまし、劇あそびとして、みんなであそぶことができたといえるのではないだろうか。即ち、耳新しいものより、やはり、絵本でみなれた、また、お話をでききなれたものは、劇化する場合でも、自信がもてるというか、また、表現が、のびのびとしたのしくできやすいから、このように題材が片寄つたと考えられる。そうして、これら題材には、やはり、くり返しきり返しやっても、あきない要素が、ストーリーの中にあり、幼児の心をたのしませる、スリル感、成功感、その他、劇の要素としてのたいせつなものが、含まれているのだということを感じさせられたのである。

(四) 三学期の実践

三学期は、生活発表会というものがあって、お友だち同士、また、おかあさんに見てもらおうということを前提にした、劇あそ

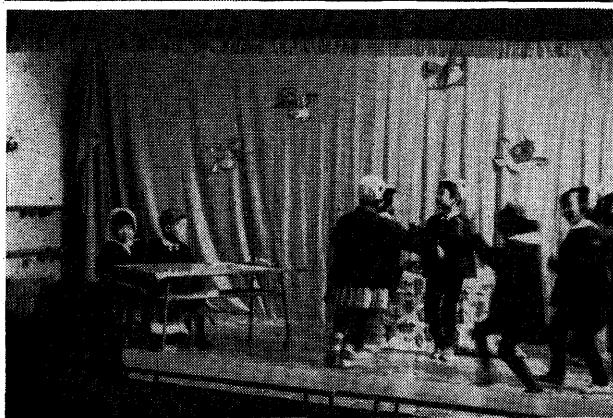
びがなされるわけで、今までは、ただ、自分たちがたのしんで、自己表現、感動表現ができるよかつたのであるが、今度は、観客を意識するという面がはいりこんでくる。従つて、観客の面前で表現活動をする場合、全く、観客がない場合より、観客にやっていることがわかるようにしたいということが、一つ加わってくるわけで、そこのところが、いかにあるべきか、ということだが、問題になってくるわけである。人にみせるためというのではないが、みてもらつていてたのしく、そして、自分なりに、自己表現を満足させるだけのあらゆる面の保育の総合された発表として、幼児たちの望ましい姿が結集されなければならないわけである。

そして、この発表会の在り方には、各園それぞれの事情によって、自ら条件も異なってくる。四日市のほとんどの園は、遊戯室というか大せいが集ることのできる広い部屋をもつていてない。それらの園では、従来は、小学校の講堂で、いわゆる“生活発表会”というものをしていたわけであるが、幼児のほんとうの劇あそびは、そうした、一ぺんきりのものではなく、むしろ、日常の保育の中にあるということだが、はつきりした以上、ことさらに、大々的なものをする必要がないとさえいえる。

従つて、わたくしたちは、保育室に、まず雰囲気を出すため、簡単な幕をとりつけ、舞台と、観客席の感じをだし、そのまま、発表会場としたりして、場に対する抵抗を少なくするという配慮

をし、幼児がふだんの生活のままに、いきいきと活動できるように、場の設定において、まず、考えたのである。

また、二学期にしたクリスマスの経験をさらに充実したものにしていくように心掛け、今まで経験した集団あそびや、フォークダンス、リズム表現などを、なるべくたくさんとり入れるようにして、演じている幼児も、見てるおかあさんも、ともに楽しく



過せる発表会ということを念頭に、すすめることとした。勿論、ストーリーをそのまま、おつたりせず、子どもとの話し合いでその中に、あそびもダンスもどりいれ、役割もかわりあって「あれもしてみたい」「これもやりたい」という幼児の気持をたいせつにしてやりながら、だんだんと、劇らしいものにしていくというようにした。ときには、劇中の集団あそびの方にむちゅうになりました。観客席の方までかくれにきてしまったり、なりたい役の希望がかたよって、その役割をじんけんできめるだけ、ひと仕事ほんとに観客席の方までかくれにきてしまったり、なりたい役の希望がかたよって、その役割をじんけんできめるだけ、ひと仕事であり、またのしくもありで、かずかずのエピソードが、その中でみられたのである。

また、劇あそびでは、雰囲気をつくるということが、たいせつな要素のひとつであることは、いうまでもないので、かくれるというあそびや行動に伴って、ほんとかくれられるだけの大きさのある小道具（例えば、大きな木、時計、広い花畠など）をみんなで（勿論、教師も含めて）協力してつくったり、それぞの役にふさわしいお面や、大きさでな

いちょっとした、装をつけて、その役の感じを一層出すようにしたり、また、大人からみたら、がらくたと思われるようなものを集めて、結構たのしいたからものをつくったりして、その雰囲気をもりあげるようにした。

そして、このようにして、役割をかわりあつたり、くり返しあそびながら、すすめることによって、子どもたちが、どうやら、そのものになりきって、劇あそびをたのしみながらしかも、おかあさんたちに、みてもらえるものへと、発展させることができたのである。

そして、発表会が、おわってからも「今日は、ぼくはこの役をする」「わたしは、○○をするわ」というようにして、「あきる」となく、何回も、あの劇、この劇と、たのしく演じて、くり返しあそばれたのである。

このことは、従来のような、発表会のための劇においては、みられなかつたことで、ほんとうに、子どもたちの中にとけこんだ、たのしい劇あそびであったということを、物語っているといえるのではないだろうか。

(五) おわりに

以上、『児童の発達と劇あそびの指導』について、大まかではあるが、わたくしたちのサークルで、一年間してきたこ

とをのべたのであるが、専門的な研究に基づいてこの指導について考えたものでもなく、現場でぶつかる種々の問題を話し合い、

子どもをよくみると、いう活動にはじまって、試行錯誤しながら、歩んだ経過を述べたのにすぎず、多々の問題が残されていることと思われるが、劇あそびを何か特別なものといった、従来の考え方を打破し、いつ、どこでも、チャンスをとらえて、表現活動をのばし、はぐくんでいたならば、もつともつとたのしい、すばらしい劇あそびが誕生してくるのではないだろうか。そして、まず、教師のかまえとして、「○○さんのおかみ、とてもじょうずね」といったように、口先だけほめるのではなく、「ワア、こわいおおかみ」と、教師自身、ことばと、身体表現によって、感動し、子どもの中にはいり込める教師でありたい、とつくづく感じさせられたのである。

ほんとうに、遅々とした、つたない歩みではあつたが、このようなことを、自分たちの経験の中から、学び得たということは、やはり、わたくしたちなりの、進歩であつたと思っている。

四日市市幼稚園言語サークル

泊山幼稚園 石坂 昭子 海蔵幼稚園 鶴井 貞子
三重幼稚園 馬路やゑ子 三重幼稚園 黒宮 明美
内部幼稚園 位田美夫子 羽津幼稚園 井上 公子
川越幼稚園 稲垣 容子